

村上春樹『1Q84』における歴史記憶の語り方

The Narrative of Historical Memory in Haruki Murakami's *1Q84*

馮 英華
Yinghua Feng

1 はじめに

村上春樹文学には「歴史記憶」の影が見えるのか。人気作家村上春樹は、最初内向的な作風で社会に無関心な青年を描いてきたが、1994年、『ねじまき鳥クロニクル』を皮切りに社会問題を真正面から題材にしたことで周囲を驚かせた。『1Q84』は2009年5月から、書き下ろしとして新潮社から全三巻が順番に発売された。出版不振と読書離れの中に誕生したベストセラーなので、さらに話題になっている。海外でも好評であり、韓国、ロシア、中国、ヨーロッパなどで、各言語による翻訳版も多数出版された。

『1Q84』は複雑な構成を持ち、様々なテーマを含む多義的な小説であり、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』のような「総合小説¹」とも言えるであろう。村上春樹作品にしばしば登場する課題がこの作品には多数込められており、ドメスティック・バイオレンス (DV)、カルト、戦争の記憶などの問題を挙げることができる²。したがって、これまでの村上春樹小説以上に、読み手によって多様な解釈が可能になり、メタ小説的な特徴も濃厚である。作者の興味は「近過去」の1984年の書き換えにある。「そのへんの社会的再編成というか、組み替えが一段落し、オイルショックも通過し、高度資本主義みたいな体制で、世界がまた新たに進み始めていこうとする時代だった。60年代は遠くなり、僕らの世代はもう30代半ばになっていて、仕事も家庭もいちおう落ち着き、世界はこともなく進行していくように見えた。でもそこには実は暗い底流がある³」と村上氏は時代に対する危機感を示している。日本において、1984年は高度成長期の最中であり、1991年になるとバブルの崩壊が始まる。世界的な視点から見れば、1980年代後半はソ連の影響力が弱まるにともない、冷戦の終結過程が進み、90年代に入ると、ポスト冷戦の時代が始まる。このような変わりつつある時代の姿が、『1Q84』の底辺をなしている。

『1Q84』に対する評価は様々である。「社会的な題材が顕著に導入されているということ以上に、このテキストは誰もが容易にそのような事態に気づくように構造化されている⁴」というのは、構造面からの肯定的な評価である。一方、『1Q84』は単なる典型的なエンタテインメントであり、読者が感じられるのは安易な癒しだけであるというような批評⁵も、しばしば見られる。確かにエンタテインメント性は『1Q84』の特徴の一つだが、エンタテインメント性を戦略的に利用するからこそ、広大な読者層を有することができ、社会問題

¹ 村上春樹「るつぼのような小説を書きたい」『夢を見るために、毎朝僕は目覚めるのです（村上春樹インタビュー集 1997—2009）』文芸春秋、2010年9月、p.501

² 中村三春「村上春樹『1Q84』論（Book1、Book2）—歴史の書き換え、物語りの毒」『iichiko』日本ベリールアートセンター、2010年、p.57

³ 村上春樹「村上春樹ロングインタビュー」『考える人 NO33』2010年夏号、p.58

⁴ 中村三春、前掲書、p.58

⁵ 「苦しむことによって醸成される創造的な時間を内包し、読者・鑑賞者にも伝播させる「作品」があるのに対して、彼らを消費者として、時間を忘れさせようとするのがエンタテインメントだろう。『1Q84』は典型的なエンタテインメントと言えよう。村上春樹は痛みと対峙して、苦しむことを恐れずに言葉を紡いでいかなければ、人の心を「深くて広い」ものにするにはできない。さもなければそこにあるのは安易な癒しだけである。」——小畑精和『『1Q84』はエンタテインメントだ—村上春樹を通して文化論的に日本の近現代を考える』『現代の理論』（特集 日本近現代史を問う）vol.25、2010秋号、明石書店、p.143

を提起し、多くの読者に伝えることができると筆者は思っている。

本稿の目的は戦後の現代日本の記憶の文化を探求し、植民地や戦争をめぐる「記憶」のあり方がいかに日本現代文学の中に表象されているのか、さらにいかなる意味を持つのかを究明することである。村上春樹の文学を現代における「文化的言説」の典型とみなして、「文化的記憶」の形成や変遷のプロセスを探求したい。

1980年代以後、第二次世界大戦から40年以上が経ち、戦争や植民地支配の「記憶」が希薄化していくなかで、体験者の「記憶」だけではなく、その存在そのものが危機に直面し始める。それにつれて、世界各地で「記憶」をめぐる議論が活発になってきた。21世紀に入り、植民地時代や戦争を経験した人々によって共有された「経験記憶」が終焉に近づき、「文化的記憶」が「想起」と「忘却」のメカニズムによって構築され続けている。アライダ・アスマンは「芸術は、文化がもはや思い出さないということを、文化に思い出させる⁶」と述べているように、芸術と「記憶」の関係を検討する必要があると思われる。こうした観点に基づいて、村上春樹文学は忘却と想起というジレンマを抱えながら、如何に記憶に関わる役割を果たしているかについて、私論を試みる。

村上春樹文学において、戦争や植民地という歴史の記憶は一貫して一つの大きなテーマになっている。『羊をめぐる冒険』（1982年）、『ねじまき鳥クロニクル』（1994-1995年）、「ノモンハン鉄の墓場」（1998年）、『海辺のカフカ』（2002年）などに、歴史の記憶は影を落としている。その歴史の記憶を語る「村上春樹文学の伝統」が引き継がれ、最新作の『1Q84』ではしばしば「満洲」にまつわる記憶が語られる。本稿では戦前・戦時の植民地の「過去」をめぐる「記憶」がいかに1980年代以後の日本の「現在」に連結されるのかという問題に焦点をあわせて分析する。具体的に言えば、『1Q84』における「歴史の記憶」の語り、主に父子関係による歴史記憶の伝承のあり方について、検討してみる。

2 青豆とタマルに託される「歴史の記憶」

『1Q84』というテキストは1984年から「1Q84年」への書き換えが図られ、現実の世界と想像の世界が混淆し合う構造になっている。1984年にせよ、1Q84年にせよ、植民地や戦争に関する歴史記憶は遠景とされ、主に語り手の記述により再現される。その歴史の記憶は「現在」とコントラストを成している。村上春樹による青豆とタマルの描写に歴史の記憶が間接的に現れてくる。

青豆の両親は「証人会」の信者であり、青豆も幼少期は毎週日曜日に母と二人で家庭訪問による宣教をさせられるなど信者になるように育てられた。10歳の時に信仰を捨てることを宣言し、家族との交流は絶える。青豆は歴史に関連した書物を愛読し、歴史の試験では常にクラスで最高点を取った。暗殺の仕事を経た後、緊張する神経を鎮めるために、ミュージックバーに入って、ゆっくりとお酒を飲みながら、歴史の本を出して読むことになる。

ショルダーバッグから本を出して読んだ。一九三〇年代の満州鉄道についての本だ。満州鉄道(南満州鉄道株式会社)は日露戦争が終結した翌年、ロシアから鉄道線路とその権益を譲渡されるかたちで誕生し、急速にその規模を拡大していった。大日本帝国の中 国侵略の尖兵となり、一九四五年にソビエト軍によって解体された。一九

⁶ アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』水声社、2007年12月、p.440

四一年に独ソ戦が開始されるまで、この鉄道とシベリア鉄道を乗り継いで、下関からパリまで十三日間で行くことができた。

ビジネス・スーツを着て、大きなショルダーバッグを隣りに置き、満州鉄道についての本(ハードカバー)を熱心に読んでいけば、ホテルのバーで若い女が一人で酒を飲んでいても、客選びをしている高級娼婦と間違えられることはあるまい、と青豆は思う。しかし本物の高級娼婦が一般的にどんなかこうをしているのか、青豆にもよくわからない。もし彼女が仮に裕福なビジネスマンを相手にする娼婦であったなら、相手を緊張させないためにも、バーから追い出されないためにも、たぶん娼婦には見えないように努めるだろう。たとえばジュンコ・シマダのビジネス・スーツを着て、白いブラウスを着て、化粧は控えめにして、実務的な大振りのショルダーバッグを持って、満州鉄道についての本を開いているとか。それに考えてみれば彼女が今やっているのは、客待ちの娼婦と実質的にさして変わらないことなのだ。⁷

この部分の中の「満州鉄道」の歴史に関する叙述によって、語り手が何気なく読者に歴史の知識を教えているようなスタンスを取っていると感じられる。娼婦に間違えられるかという青豆の心理活動の描写は、「満鉄の歴史」の唐突さを緩和する効果があると思われる。さらに、満州とは『ねじまき鳥クロニクル』(1994—95年)を連想することができる。なぜなら、『ねじまき鳥』はノモンハン戦争や新京のことなど、同じく歴史的要素を取り入れる作品である。また、青豆という登場人物から、村上春樹自身の影がみえてくることに注目したい。村上春樹は自らかつて歴史少年だった経験を吐露した。「中央公論社の『世界の歴史』なんかおもしろくて、中学から高校にかけて、全巻何度も繰り返し読みました⁸」と述べている。なお、村上春樹はノモンハンと出会った経緯について次のように述べている。

ずっと昔、小学生の頃に歴史の本の中で、ノモンハン戦争の写真を目にしたことがあった。今でもはっきりと覚えているけど、そこには奇妙にずんぐりとした古っぽい戦車と、これもまた奇妙にずんぐりとした古っぽい飛行機の写真が載っていた。そして一九三九年の夏に、満洲駐屯の日本軍とソビエト・モンゴル人民共和国(外モンゴル)連合軍とのあいだに、満洲国国境線をめぐる激しい戦闘があり、日本軍が大きな被害を受けて撃退されたという短い記述があった。⁹

ここから、歴史少年の経験が村上春樹の歴史認識に大きな影響を与えたということが分かる。もう一人の登場人物—タマルにも歴史の記憶が託される。タマルは、樺太で終戦の前年に生まれた。両親は労働者として送られてきた朝鮮人であり、終戦後、日本に帰れなくなった。1歳だったタマルは日本人帰国者に託されて北海道に渡った。それ以来両親とは会えなかった。その後、カトリック系の孤児のための施設に入れられ、形だけの養子縁組をして日本国籍をとった。タマルの元の名字は「朴」としかわからない。それは個人的な経験とも言えるが、そこには植民地開拓の集合記憶も含まれている。同時に、親子の間

⁷ 村上春樹『1Q84 BOOK1』新潮社、2009年5月、p.103

以後、引用においては、村上春樹『1Q84 BOOK1』『1Q84 BOOK2』『1Q84 BOOK3』を、それぞれBOOK1、BOOK2、BOOK3と略す。

⁸ 村上春樹、前掲書「村上春樹ロングインタビュー」、p.25

⁹ 村上春樹『辺境・近境』新潮社、1998年、p.165

における記憶の断絶も現れている。

以上のように拓殖や戦中の歴史記憶は間接的に表現され、親世代の退去や不在により、遠ざかっていく。歴史の本は記憶のメディアとして機能しており、作者によって作られた小説は歴史を思い出させる役割を果たすことが可能である。ところが、引用された歴史の記述は、読者に歴史を想起させる作用があるとはいえ、結局エンタテインメント性に満ちた雰囲気呑み込まれて、その作用が弱められるのも事実なのであろう。とにかく、『1Q84』において、拓殖や戦争の記憶は遠景となっており、1980年代の記憶のほうが前景となる。こうして「歴史少年」であった村上は、複数の時代を内包するパノラマのような構図を作り上げ、読者に記憶に関する何らかのイメージを伝えようとしているのではなかろうか。

3 「ずれ」と意識された「記憶」

小説『1Q84』の舞台となった年である1984年に、村上は、短編集『蚩、納屋を焼く、その他の短編』を出している。その作品群において、既に、現実のただ中にふと生じた微妙で繊細な「ずれ」の感覚、「現代への郷愁」とも言える感情が描かれている。¹⁰『1Q84』では従来の村上文学の「郷愁」が引き継がれ、更にこの「ずれ」が今までに比べて最大限に表現されている。覚えのない目の前の現象に不審を抱き、記憶との「ずれ」が生じるのである。過去との断絶を抱えている非リアリスティックな登場人物だからこそ、「ずれ」・「現代への郷愁」という感覚を生み出したのである。ゆえに、現実を感じる「ずれ」は、記憶の揺れに起因すると言えるであろう。

村上春樹は「記憶」の問題を意識しながら、『1Q84』において重層的な近過去の世界を作り上げたと考えられる。天吾は一歳半の時の記憶に疑問を持ち、青豆は目前の世界が記憶の中の世界と奇妙にずれてリアリティーに欠けると感じ、二人とも記憶の揺れが描かれている。ここで二つの例をあげてみよう。天吾は繰り返し、一歳半のときの「鮮明」な記憶に悩まされる。

天吾の最初の記憶は一歳半のときのものだ。彼の母親はブラウスを脱ぎ、白いスリッパの肩紐をはずし、父親ではない男に乳首を吸わせていた。ベビーベッドには一人の赤ん坊がいて、それはおそらく天吾だった。彼は自分を第三者として眺めている。あるいはそれは彼の双子の兄弟なのだろうか？ いや、そうじゃない。そこにいるのはたぶん一歳半の天吾自身だ。彼には直感的にそれがわかる。赤ん坊は目を閉じ、小さな寝息をたてて眠っていた。それが天吾にとっての人生の最初の記憶だ。その十秒間ほどの情景が、鮮明に意識の壁に焼き付けられている。前もなく後ろもない。大きな洪水に見舞われた街の尖塔のように、その記憶はただひとつ孤立し、濁った水面に頭突き出している。(中略)でもそんなことが果たして現実に起こり得るのだろうか？ 乳幼児の脳にそんな映像を保存しておくことが可能なのだろう。

あるいはそれはただのフェイクの記憶なのだろうか。すべては彼の意識が後日、なんらかの目的なり企みを持って、勝手に拵え上げたものなのだろうか？ 記憶の捏造—その可能性についても天吾は十分に考慮した。そしておそらくそうではあるまいという結論に達した。拵えものであるにしても記憶はあまりにも鮮明であり、深い説得力をもっている。そこにある光や、匂いや、鼓動。それらの実在感は圧倒的で、まがいものとは思えない。そしてまた、その情景が実際に存在したと仮定する方が、いろん

¹⁰ 三宅晶子「生の現在としての「ずれ」」『新潮』1984年9月号、p.305

なものごとの説明がうまくついた。論理的にも、そして感情的にも。¹¹

天吾はこのようなトラウマ的な記憶を持ち、さらに父親との血縁的な関係も疑っている。この血縁関係への問いは自らのアイデンティティへの追求に当たると言ってもよいであろう。もう一人の主人公の青豆はある事件がきっかけで自分がそれまでとは微妙に違う世界にいるらしいと気がつく。覚えのない社会的大事件が数年前に発生している。何より月が二つ見える。彼女は疑惑をもちながら、新しい世界を密かに「1Q84」と名付ける。彼女が生まれ育った古くて懐かしい世界が本来の1984年である。世界は奇妙な力でずらされてしまったのである。青豆は最初に登場する場面で、首都高速を走るタクシーの中で、ラジオから流れてくるクラシック音楽のヤナーチェクの『シンフォニエッタ』を聞きながら、歴史に思いをめぐらせた。ところが、彼女は、後にタクシーの記憶を振り返ってみると、音楽の刺激により妙に思い出したものやタクシーに乗っている場面に対して疑問を抱く。青豆の心理活動は以下のように描かれている。

そう、それはとても個人的な種類の揺さぶりだった。まるで長いあいだ眠っていた潜在記憶が、何かのきっかけで思いも寄らぬ時に呼び覚まされたような、そんな感じだった。肩を掴まれて揺すられているような感触がそこにはあった。とすれば、私はこれまでの人生のどこかの地点で、その音楽と深く関わりを持ったのかもしれない。その音楽が流れてきて、スイッチが自動的にオンになって、私の中にある何かの記憶がむくむくと覚醒したのかもしれない。ヤナーチェクの『シンフォニエッタ』。しかしどれだけ記憶の底を探っても、青豆には心当たりはなかった。¹²

以上の引用は男女の主人公が記憶の不安定性や非信頼性を感じ、自問する描写である。青豆が歴史好きな原因は「すべての事実が基本的に特定の年号と場所に結びついているところだった¹³」からである。すなわち、青豆には「ずれ」を感じる現在より、歴史にリアリティーが感じられるということである。第1節ですでに論じたように、青豆に託された「満鉄」の歴史記憶は目の前の二つの月とコントラストとなる。

自分自身の記憶を信じない青豆は、目の前の世界にリアリティーを感じないため、今自分がいる世界を1Q84年と名付け、本当の1984年に戻ろうとしている。言わば、記憶の非信頼性が全編を貫いている。リアリティーへの追求の背後に存在する確実なアイデンティティの追求は、歴史記憶と深く関連していることが『1Q84』から読み取れる。特に、天吾における自らのアイデンティティの追求に関して、父親の満州体験とつながりがあると考えられる。次の節で詳しく検討しよう。

4 父子関係による歴史記憶の継続

『海辺のカフカ』（2002年）において父殺し或いは父との対決というテーマが見られるが、『1Q84』はさらにそのテーマを受け継いでいる。『1Q84』において、これまで詳しく描かれなかった父が前面に登場させられ、何組かの親子関係も設定される。親子関係は作品の解読にとって大切なヒントを提示している。その中で、最も重点的に描かれているのは天吾と父の関係である。天吾は『空気さなぎ』の書き直し、すなわち「1984」年から「1Q84」

¹¹ BOOK1、pp.30-31

¹² BOOK1、p.199

¹³ BOOK1、p.12

への切り替えに参加した重役のほかに、特別な役割は父子関係にある。天吾の母は天吾が子供のときから不在だった。天吾は父と暮らしており、毎週日曜日、父にNHKの集金につれられ、無理やり満蒙開拓のことを聞かされた。このように前世代から次世代への記憶の伝承という問題が浮上してくる。

① 父親の登場

この小説において父が初めて登場するのは、天吾の不幸な子供時代が語られるシーンにおいてである。そこで語り手は、父親の「満州国」時代から戦後のNHK集金までの経験を詳しく説明する。

天吾の父親は終戦の年に、満州から無一文で引き揚げてきた。東北の農家の三男に生まれ、同郷の仲間たちとともに満蒙開拓団に入り満州に渡った。満州は王道楽土で、土地は広く肥沃で、そこに行けば豊かな暮らしを送れるという政府の宣伝を鵜呑みにしたわけではない。王道楽土なんてものがどこにもないことくらい、最初からわかっていた。ただ彼らは貧しく、飢えていた。田舎に留まっても餓死寸前の暮らししかできなかったし、世の中はひどい不景気で失業者が溢れていた。都会に出たところでまともな仕事が見つかるあてもない。となれば満州に渡るくらいしか生き延びる道はなかった。有事の際は銃をとれる開拓農民として基礎訓練を受け、満州の農業事情についてのまにあわせの知識を与えられ、万歳三唱に送られて故郷をあとにし、大連から汽車で満蒙国境近くに連れていかれた。そこで耕地と農具と小銃を与えられ、仲間たちとともに農業を営んだ。石ころだらけのやせた土地で、冬には何もかもが凍り付いた。食べるものがないので野犬まで食べた。それでも最初の数年は政府からの援助もあり、なんとかそこで生き延びることはできた。

一九四五年八月、ようやく生活が落ちつきを見せ始めた頃、ソビエト軍が中立条約を破棄し、満州国に全面的に侵攻した。欧州戦線を終結させたソビエト軍は、大量の兵力をシベリア鉄道で極東に移動し、国境線を越えるための配備を着々と整えていた。父親はちょっとした縁で親しくなったある役人からそのような切迫した情勢をこっそり知らされ、ソビエト軍の侵攻を予期していた。弱体化した関東軍はとても持ちこたえられそうにないから、そうなったら身ひとつで逃げ出せるように準備をしておくと、その役人は彼に耳打ちしてくれた。逃げ足は速ければ速いほどいい、と。だからソ連軍が国境を破ったらしいというニュースを耳にするや否や、用意しておいた馬で駅に駆けつけ、大連に向かう最後から二番目の汽車に乗り込んだ。仲間のうちでその年のうちに無事に日本に帰り着けたのは彼一人だけだった。¹⁴

ここで描かれた「父」の経験は、その時代においてごく普通の一人の開拓民の個人的な経験であり、無数の天吾の父のような開拓民の経験により開拓民の全体像が形成される。この満州体験は七転八倒であり、九死に一生を得たといったようなトラウマ的な記憶であるといえよう。父親は東北地方の貧農として生まれ、満蒙開拓団に参加する。ソビエト連邦の満州侵攻を事前に察知し、侵攻と同時に日本に逃げ帰る。日本に引き揚げてからは満州での知人の紹介でNHKの集金の仕事をした。満州での知人は父と共有する経験を持ち、共有する経験により信頼関係を持った上で、NHKの集金人の仕事を父に紹介したのである。きわめて私的な思い出さえも、個人が属するさまざまな集団の内部におけるコミュニケーションと相互行為に参加することで構築され、固定され、維持される。従って、この共

¹⁴ BOOK1、p.169

有する記憶はある種の集合的記憶といえるであろう。村上は『ロングインタビュー』にて集合的記憶に関して次のように語っている。

僕の言う『歴史』は、たんなる過去の事実の羅列でも引用でもなく、一種の集合的記憶としての歴史です。たとえば、ノモンハンでの間宮中尉の強烈な経験も、ただの老人の思い出話ではなく、僕の血肉となっているものであり、現在に直接の作用を及ぼしているものです。そこが大事なんです。¹⁵

語り手による叙述を通して、満蒙開拓についての集合的記憶が読者に伝えられたとはいえるであろう。天吾には父親の満州体験は「いやというほど聞かされた話だった」¹⁶。父親にとっては、満州体験がトラウマ的な人生経験とはいえるが、「子守歌」や「童話」の代わりに、それを色彩に富んでいた語り口で子供に伝えた。父親に満州体験を繰り返し聞かされた結果、子供世代の天吾は受動的に父親の人生の記憶を受け継いでいる。天吾が父から受け継いだ「満州国」時代の記憶は個別的で口頭により生まれた記憶なので、ある種のコミュニケーション記憶とも言える。こうして親子のコミュニケーションによる歴史記憶の伝承が描かれている。

② ト라우マとなる日曜日

天吾にとって NHK の集金と日曜日はトラウマ的な存在である。毎週日曜日に父と一緒に NHK 受信料の集金ルートを回らされており、級友たちのように遊べず、クラスで「NHK」と呼ばれて「異人種」にならざるを得なかったこともある。ついに小学校5年生の時に拒絶し、父親を離れて、自立を宣告した。「日曜日が現実の脅威ではなくなった今でも、日曜日の朝に目を覚まし、わけもなく暗い気持ちになることがある。身体の節々に軋みを感じ、吐き気を覚えることもある。そういう反応が心に染みついてしまっているのだ。おそらく深い無意識の領域まで」¹⁷、天吾の心身における反応はトラウマ的な体験の長期にわたる影響として出現する混乱である。いわゆる「心的外傷後ストレス障害 (PTSD)」の症状だと見なしてもよいであろう。この PTSD の症状は繰り返してテキストの中で天吾を通して強調されている。天吾はテレビ・アンテナを見かけても、つらい思い出が呼び起こされるようになる。

二人並んで車窓の外を眺めていた。のっぺりとした平板な土地に、これという特徴のない建物が、どこまでも際限なく立ち並んでいる。無数のテレビ・アンテナが、虫の触角のように空に向けて突き出している。そこに暮らす人々は NHK の受信料をちゃんと払っているのだろうか。日曜日には天吾は何かにつけて受信料のことを考えてしまう。そんなこと考えたくなんかないのだが、考えないわけにはいかない。〔下線引用者〕¹⁸

以上の引用から天吾の症状について考えてみよう。児童期のトラウマは心理上の変化をもたらし、青年期になってから種々の心理障害が生まれてしまうことになったといえよう。では、父親の満州体験と天吾のトラウマ的な NHK 集金活動はいかに繋がっているか。子

¹⁵ 村上春樹、前掲書「村上春樹ロングインタビュー」、p.26

¹⁶ BOOK1、p.171

¹⁷ BOOK1、p.165

¹⁸ BOOK1、p.180

供は実際に自ら災いを体験しなくても、親の口述により、つらい経験が認識され、内面化するようになる。天吾の場合を考えてみれば、父親の満州体験を想起するには、何らかの刺激が必要とする。トラウマになる NHK 集金活動は満州体験を想起する媒介になっていると思われる。天吾が恐怖の「日曜日」の「記憶」を「想起」すると、植民地満洲の〈記憶〉も呼び起こしてしまう。共通点となるのは、ナショナル・アイデンティティの形成に伴う苦勞、恥辱と挫折である。したがって、トラウマ的経験を基底としている〈記憶〉が、想起の空間＝「満洲」から、想起の時間＝「日曜日」に移行したといえる。この記憶を体現している担い手が交代すれば、その内容もまた移ろう。こうして戦争や植民地をめぐる〈記憶〉が継承され、変容したということがテクニカルに語られている。

同時に、『1Q84』に描かれた父子関係は、いささか作者のモチベーションを含んでいると考えられる。2009年エルサレム賞の授賞式スピーチで村上春樹は唐突に前年90歳で亡くなった父親の思い出を話している。

父は元教師で、時折、僧侶をしていました。京都の大学院生だったとき、徴兵され、中国の戦場に送られました。戦後に生まれた私は、父が朝食前に毎日、長く深いお経を上げているのを見るのが日常でした。ある時、私は父になぜそういったことをするのかを尋ねました。父の答えは、戦場に散った人たちのために祈っているとのことでした。（中略）父が仏壇の前で正座している後ろ姿を見たとき、父の周りに死の影を感じたような気がしました。¹⁹

「死の影を感じたような」歴史の記憶の影とは、父の戦争体験を継承することにより村上の内面でも形成されたある種のトラウマと言ってもいいが、彼の創作は歴史の記憶の陰によって大きな影響を与えられた。したがって、天吾と父の関係と作家自身における父子関係とは無縁ではないと思われる。

③ 子のやり取り

BOOK2では父親は前面に登場する。父の話によれば、母は天吾を生んだ数か月後に亡くなったのである。天吾は父の話信じないどころか、父との血縁的な関係までも疑っている。それにも関わらず、認知症の父親を見舞いに千倉の療養所を訪ねて行った。小学校5年生の時、父親のもとを離れてから、父親に寄り付かなくなり、その後は二回しか会わなかった。その天吾が再び父親に会うモチベーションは何だろうか、語り手ははっきり述べていない。おそらく読者として、読み取れるのは、天吾が消極的に親子関係を修復しようというより、母及び親子の血縁関係を究明しようとしている、ということであろう。療養所で、天吾は父にドイツの短編小説「猫の町」を読み聞かせる。そして、親子の間に対話が行われる。

「その猫の町にテレビがあるのでしょうか?」、父親はまず職業的な見地からそう質問した。

「1930年代にドイツで書かれた話だし、その頃にはまだテレビはありません。ラジオはあったけど」

「私は満州もおったが、そこにはラジオもなかった。放送局もなかった。新聞もなかなか届かず、半月前の新聞を読んでおりました。食べるものだってろくになく、女

¹⁹ 村上春樹「壁と卵」、大胡田若葉、早川誓子編集・翻訳協力『心をゆさぶる平和へのメッセージ―なぜ、村上春樹はエルサレム賞を受賞したのか』、pp.50-53

もおらんかった。ときどき狼が出た。地の果てのようなところでした。」

彼はしばらく黙して何かを考えていた。たぶん若いときに満州で送った、開拓移民としての苦しい生活のことを思い出しているのだろう。しかしそれらの記憶はすぐに混濁し、虚無の中に呑み込まれていった。父親の表情の変化から、そのような意識の動きが読み取れた。²⁰

「猫の町」は、彼が失われる場所として、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）の世界の終わりの壁や街や、『海辺のカフカ』の結末の森の中の異界などに似通っている。あまり口を利かないそのときの父親は、意外にもこの「猫の街」に共感を持ち、開拓移民時代の「満州」のことを思い出している。両方ともテレビもラジオもないし新聞もなかなか届かない、既存の世界から遠い、虚無で空白の世界に過ぎないのであろう。時間が経つとともに、疎遠になる風景にまつわる記憶も「混濁し、虚無の中に呑み込まれる」。『羊をめぐる冒険』と合わせて考えて見れば、「羊博士や右翼の大物が行った中国東北部、すなわち“満州”が、当時の日本人にとって〈新天地〉であり、新世界であったことはいうまでもない²¹」。しかし、「新しい世界、天地、大陸への渴望は、いつも人間たちを未来や虚構、夢や幻想の世界へと誘っていったのである²²」。虚無感を抱えている父には、「満州」はすでに幻のようなものにすぎない。

そして、天吾はずっと気になっている親子の血縁関係について、ずばりと父親に「それでは、僕の父親は誰なんですか？」と問いかける。「ただの空白だ。あんたの母親は空白と交わってあんたを産んだ。私とその空白を埋めた²³」と父親が答える。この答えを通して、天吾は始めて父親の内心を認識するようになる。

この男は空っぽの残骸なんかじゃない。ただの空き屋でもない。頑強な狭い魂と陰鬱な記憶を抱え、海辺の土地で訥々と生き延びている一人の生身の男なのだ。自らの内側で徐々に広がっていく空白と共存することを余儀なくされている。今はまだ空白と記憶がせめぎあっている。しかしやがては空白が、本人がそれを望もうと望ままいと、残されている記憶を完全に呑み込んでしまうことだろう。それは時間の問題ではない。彼がこれから向かおうとしている空白は、おれが生まれ出てきたのと同じ空白なのだろうか？²⁴

「空白と記憶」のせめぎあいはまさに「忘却」と「記憶」のジレンマに当たるのであろう。それは村上が歴史記憶という問題を強く意識している証であると思われる。結局、記憶の空白がだんだん優位に立つようになり、この空白を埋める役を担当するのは子世代の天吾にほかならない。そして「僕の父は誰なんですか」という自らのアイデンティティの究明は、父親による記憶の衰退とともに、遠ざかっていく。

④ 父の退場と和解

BOOK3 ではさらに父子関係が強調される。天吾は自活するようになるまで、育てた恩

²⁰ 村上春樹『1Q84 BOOK2』2009年5月、pp.180-181

²¹ 川村湊「“新世界”の終わりとハート・ブレイク・ワンダーランド」『村上春樹スタディーズ02』若草書房、1999年7月、p.251

²² 同書、p.256

²³ BOOK2、pp.182-183

²⁴ BOOK2、p.183

義があると思うため、病状がさらに悪化した父親を看病するため、長く逗留するという設定になっている。父親はもう話せなくなっているため、天吾は父と返事のない会話をした。

NHKの集金に連れ回されたことについては、今思い出してもうんざりするし、胸も痛む。嫌な記憶しかない。でもきっとあなたには、それ以外に僕とコミュニケーションをとる手段が思いつけなかったんだろう。(中略)それがあなたにとってはもっともうまくできることだったんだ。あなたと社会との唯一の接点のようなものだった。きっとその現場を僕に見せたかったんだろう。今になれば僕にもそれがわかる。²⁵

こうして天吾は心中を打ち明けて、父と和解ができた。そして、天吾は子どもとしての法律上の義務を果たし、父が死んだ後、遺品の片づけや葬式の手配などを行う。父親の死に対する天吾の心理活動に力点において描写している。次の例をあげよう。

あなたが僕の実の父親であったにせよ、なかったにせよ、それはもうどちらでもいいことだ、天吾はそこにある暗い穴に向かってそう言った。どちらでもかまわない。どちらにしても、あなたは僕の一部を持ったまま死んでいったし、僕はあなたの一部を持ったままこうして生き残っている。実際の血の繋がりがあろうがなかろうが、その事実が今さら変わることはない。時間既にそのぶん経過し、世界は前に進んでしまったのだ。〔下線 引用者〕²⁶

「でもある場合には、死んだ人はいくつかの秘密を抱えていってしまう」と天吾は言った。「そして穴が塞がれたとき、その秘密は秘密のままで終わってしまう」。〔下線 引用者〕²⁷

「あなたは僕の一部を持ったまま死んでいったし、僕はあなたの一部を持ったままこうして生き残っている」という一文が示しているように、子供は父親の生理的な生命の延長のみではなく、父親と切っても切れない重なる部分がほかにもある。その重なる部分は互いの記憶のシェアと自己同一性の確定に存在するであろう。父の退場とともに、一部の記憶は継続され、一部の記憶は中断せざるを得ない。村上春樹の場合は、エルサレム受賞式のスピーチで、「父は私が決して知り得ない記憶も一緒に持って行ってしまいました」²⁸と述べた。父の内部の心の傷を自らの傷として受け継いだ作者にとって、「父」は永遠に解き明かせない謎であるのかもしれない。

「BOOK1」で語られた父の「満州体験」は「BOOK3」では前面に出ていないが、天吾が父の遺品を確認する場面で間接的に表されている。

NHKに入る以前の父親の人生を示す記録は、その封筒にはひとつとしてなかった。まるでNHKの集金人になったところから、父親の人生は開始したみたいだった。²⁹

²⁵ BOOK2、pp.488-489

²⁶ BOOK3、p.490

²⁷ BOOK3、p.483

²⁸ 大胡田若葉、早川誓子編・翻訳協力『心をゆさぶる平和へのメッセージ—なぜ、村上春樹はエルサレム賞を受賞したのか?』ゴマブックス、2009年、pp.50-53

²⁹ BOOK3、p.442

この一節からわかるように、NHKに入る以前の父親の人生は記録されていない。この記録されていない父親の「満州体験」や戦前の人生経験は、「忘却」される危険があると、村上春樹の歴史記憶の語り方によって、示されているのではなからうか。作者は歴史記憶の喪失を意識したからこそ、ここで親子関係の話を読者に伝えていると考えられる。

5 終わりに

『1Q84』という作品においては、植民や戦争の記憶は遠景となり、1984年前後の時代は前景となり、1Q84年は虚の現在として描かれている。こうして実と虚が交じり合う構図が展開されている。「僕らの記憶は、個人的な記憶と、集合的な記憶を合わせて作り上げられている」、「歴史とは集合的な記憶のことなんだ」³⁰という主人公天吾の話を通して、作者の歴史観が垣間見える。そして、天吾を始め、青豆、タマルなどの登場人物に歴史の記憶が託されており、更に、「20QQ」に生きている我々に、ある種の情報を発信しようとしているのではなからうか。

生き残り世代と次世代、すなわち、主人公である子供世代(子)と大人世代(親)の関係が、日本の現在と過去の連続性を構築していると思われる。本稿において、村上春樹は『1Q84』では、歴史が回避されるのではなく、潜在的な「記憶」として封印されたということを論じた。こうして拓植や戦争の記憶(特に満州にかかわる記憶)は回避されず、間接に語られ、潜在的なものとされ、体現している担い手の交代によって、変容し、引き継がれるということが見えてきた。同時に、親世代の退場につれて、国家の「歴史の記憶」を担ってきた体験者が世代交代し、歴史の記憶の風化が進んでいる、と村上春樹は危機感を抱えて、問い直しながら、小説家としての歴史記憶の語り方を模索しているのであろう。

本稿は主に、『1Q84』に見える歴史記憶やその語り方をめぐって分析することを試みた。他の作品との繋がりや歴史記憶の語り方の変化などについては、別稿に譲りたい。

参考文献

1.村上春樹の作品

村上春樹『1Q84 BOOK1』新潮社、2009年5月、『1Q84 BOOK2』新潮社、2009年5月、『1Q84 BOOK3』新潮社、2010年4月

—— 『ねじまき鳥クロニクル 第1部 泥棒かさなぎ編』新潮社、1994年4月、『ねじまき鳥クロニクル 第2部 予言する鳥編』新潮社、1994年4月、『ねじまき鳥クロニクル 第3部 鳥刺し男編』新潮社、1995年5月

—— 『辺境・近境』新潮社、1998年、『辺境・近境(新装版)』新潮社、2008年

—— 「村上春樹ロングインタビュー」『考える人』(特集 村上春樹ロングインタビュー) No.33,2010年夏号、新潮社、pp.13-100

—— 「壁と卵」大胡田若葉、早川誓子編・翻訳協力『心をゆさぶる平和へのメッセージ——なぜ、村上春樹はエルサレム賞を受賞したのか』ゴマブックス、2009年5月、pp.50-53

2.その他の文献

アライダ・アスマン著、安川晴基訳『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』水声社、

³⁰ BOOK1、pp.459-460

2007年12月

- 内田樹他「村上春樹の決断」『文学界』第64巻第7号、文藝春秋社、2010年7月号、pp.158-183
- 加藤典洋・清水良典・沼野充義・藤井省三「村上春樹『1Q84』を読み解く」『文学界』第63巻第8号、文藝春秋社、2009年8月号、pp.216-231
- 川村湊「現代史としての物語——ノモンハン事変をめぐって——ハルハ河に架かる橋」
『村上春樹——予知する文学<特集> ——「ねじまき鳥クロニクル」の分析』『國文學：解釈と教材の研究』40(4)（特集 村上春樹——予知する文学）1995年3月号、學燈社、pp.57-63
- 栗坪良樹・柘植光彦『村上春樹スタディーズ01』若草書房、1999年6月、『村上春樹スタディーズ02』若草書房、1999年7月、『村上春樹スタディーズ04』若草書房、1999年9月
- 小畑精和「『1Q84』はエンタテインメントだ——村上春樹を通して文化論的に日本の近現代を考える」『現代の理論』（特集 日本の近現代史を問う）vol.25、2010秋号、明石書店、pp.132-143
- 小森陽一『村上春樹論』平凡社新書、2006年5月
- 小森陽一・成田龍一他『岩波講座 近代日本の文化史9——冷戦体制と資本の文化 1955年以後1』、『岩波講座 近代日本の文化史10——問われる歴史と主体 1955年以後2』岩波書店、2002年12月
- 関沢まゆみ編『戦争記憶論—忘却、変容そして継承』昭和堂、2010年7月
- 三宅晶子「生の現在としての『ずれ』」（村上春樹『螢・納屋を焼く・その他の短編』書評）『新潮』1984年9月号、p.305、『村上春樹（シーク&ファインド）』青銅社、1984年7月、pp.154-155
- 『村上春樹がわかる』（『AERA Mook』75）朝日新聞社、2001年
- 藤井省三『村上春樹の中の中国』朝日新聞社、2007年7月